チ、高さ五ミリの突帯があり、そのつけ根よりタテ方向に沈線が一つあり、きぬがさ片と認められるものである。

なお、調査に際しては立命館大学講師波多野忠雅氏の御協力を得た。

（戸原純一・出土品実測図作製笠野毅）

三　深草北陵々前の深草部事務所改築敷地の調査

深草北陵は、東山連峰の西麓が京都盆地に続く東高西低の地に位置する南面の法華堂で、旧深草安楽行院跡地にあたり、現在東側は嘉祥寺と境を接している。事務所改築の敷地は、陵前の参道西側に接する、旧事務所の撤去跡地を含む東西四・四メートル、南北七・五メートルの長方形の地域で（第8図）、安楽行院の遺構が存在する可能性があるので、昭和四十九年九月十七日から同月二十一日まで事前調査を行った。

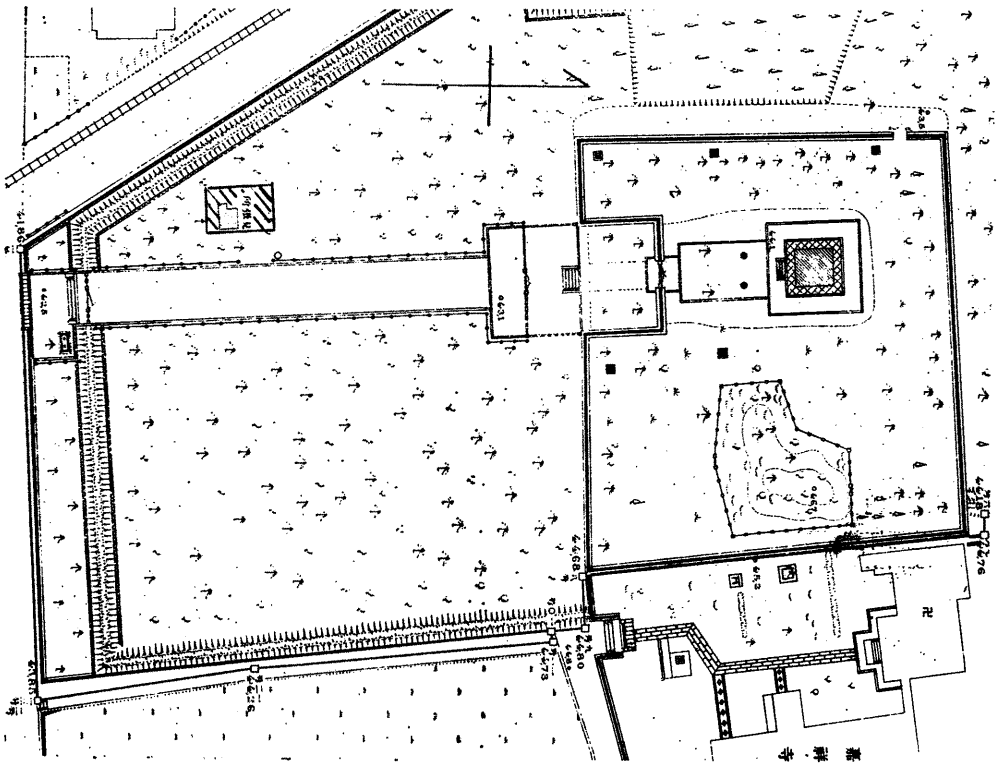
発掘は建築の基礎掘形に従い、敷地の内周全面一メートル幅の区域と、長辺の中央部で東西に横断する一メートル幅の区域と、更にこの西側の浄化槽設置箇所、南北二・一五メートル、東西一・三五メートルの区域を実施し、発掘区として第9図のようにA～Fの区割を行い、F区は深さ約一・二メートル、他の区は深さ約〇・六～〇・七メートルまで発掘した。

発掘区の地層の状況は、各区とも上から黒灰色腐植壌土層、茶褐色砂礫層、黒褐色粘性土層の順で、三層に分れるが、一部では旧事務所の基礎工事で攪乱されて、第一第二層の区別がし難い所がある。第二層のみ、土器片、陶磁器片、古瓦片等の遺物を包含する。

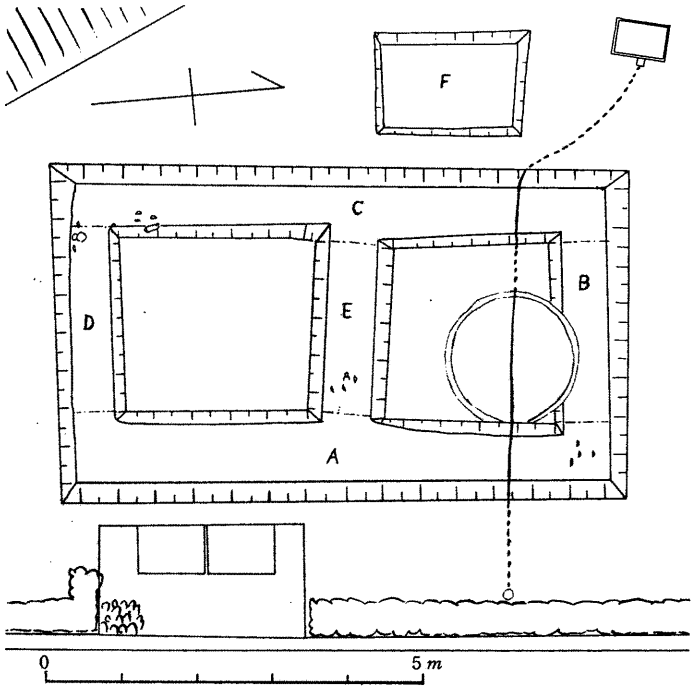
遺構は、D区の南壁沿いに石灰と砂利を固めた円形の構造物（第11図）を検出した。規模は直径一・八メートル、高さ〇・三五～〇・四メートル、縁の厚さ〇・一メートルで、側壁の上部は削り取られており、その上東西の両端部分は、水道管の敷設の際に側壁が破壊されていた。この遺構は第二層を掘込んで、第三層の上面に設けたもので、何時頃のものか明確ではないが、外周に蛆のさなぎ殻が存するので、野壺と呼ばれる近世の肥溜の底部と考えられる。

出土遺物は、合計一六三点で、A・B・C・E・Fの各区の第二層からあり、F区からは、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦、塼等の破片、他の区からは、土師器、須恵器の破片のみが出土した。いずれも破片で、A・C・F区が特に多く、一箇所にまとまっては出土する傾向がある。土師器、須恵器は七世紀頃のもので、須恵器は叩き目のある壺底部、坏蓋、土師器は碗とへら描暗文のある高坏を第10図に図示した。磁器片には古伊万里、瓦片には「ふかくさ長左衛門」の刻印（第10図6）のある磨消布目の筒瓦片等がある。

「ふかくさ長左衛門」については、京都事務所建築係長大西之成氏の御教示によれば、明治三年の「紀伊郡深草村之内瓦町竈張図」に、仁明天皇陵の北、現名神高速道路の北側に当る場所の竈五基の内、最北端のものに長左衛門の表示があるが、現在はない。

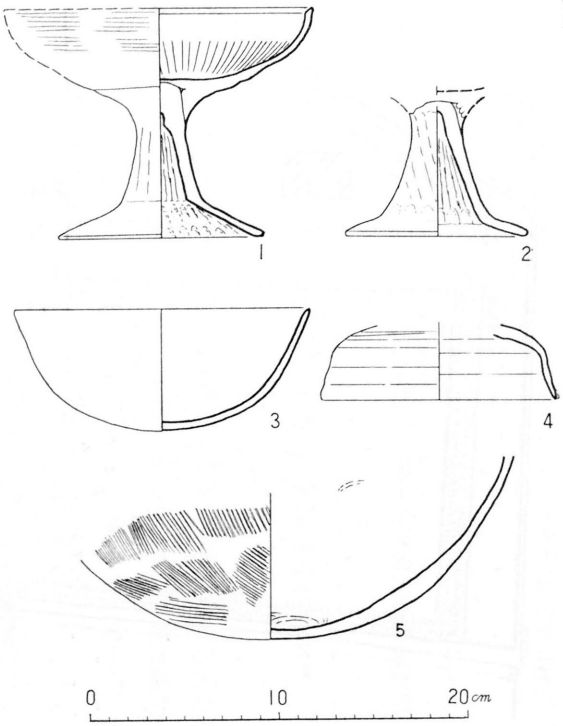


第8図　深草部事務所改築位置図（縮尺 800 分の 1）



第9図　深草部事務所敷発掘平面図（縮尺 100分の 1）

6



1　土師器高坏（B区出土）
2　土師器高坏脚（B区出土）
3　土師器埦（B区出土）
4　須恵器坏蓋（B区出土）
5　須恵器壺底部（B区出土）
　内面に青海波叩き目の消あと、輪積痕あり
6　筒瓦表面刻印（F区出土）

第10図　深草部事務所敷出土品（図4分の1，拓本原寸大）

以上の出土物は盛土に含まれて他から運ばれたものと考えられるので、野壺と思われるものは基礎を稍ずらせて保存し、予定通り事務所を建設した。

（奥田佳久・北村素一・山田辨治・石田茂輔）

第11図　深草部事務所敷出土野つぼ様遺構